

D.H.ロレンスの「蚊」の詩にみられる共生思想

鈴木 悟 史

〔抄 録〕

D. H. ロレンス (1885-1930) の詩集『鳥・獣・花』(*Birds, Beasts, and Flowers*, 1923) には、様々な動植物の詩が収められているが、本稿では、「蚊」(‘Mosquito’, CP 332-334) の詩を取り上げ、ロレンスが蚊をどのようにとらえて描写しているか、また、この詩の中にみられる人間と蚊の共生思想について考察する。

詩人は蚊という生き物を理解したいと望み、蚊に親しみを込めて様々な名前で表現し、蚊に人間と共存していく関係になるよう求めているにも関わらず、蚊の持つ様々な人間を欺くための策略によって、蚊に対する嫌悪感は高まり、詩人が望む関係は得られなかった。そこで詩人自らが蚊へ歩み寄るよう試みたが、結局詩人の望むその関係は現実のものにはなりえなかったことが、考察の結果分かった。

ロレンスの生きた時代には、黒川紀章氏の言う、社会のあり方としての「共生」の概念はなかったが、ロレンスのこの「蚊」の詩には、そのような内容の「共生」という概念を生み出す萌芽がみられる。

キーワード ロレンス、『鳥・獣・花』、「共生」の概念、歩み寄り、人間らしさ

1. 序 論

ロレンスは、詩集『鳥・獣・花』(*Birds, Beasts, and Flowers*, 1923) で様々な動植物を取り上げ、各動物に対する鋭い観察眼と洞察力で優れた多くの詩を書いている。この詩集には、「果物」・「樹木」・「花」・「福音記者たる獣たち」・「生き物」・「爬虫類」・「鳥」・「四足獣」・「亡霊」の9つの覚書きが添えられているが、「生き物」(Creatures) の項目に収められているのは蚊、魚、コウモリといった、闇の世界に生きる生き物であり、光を好む人間とは対極的な立場に生きている存在である。

そこで本稿では、ロレンスの諸作品に頻出する「闇」(darkness) というキーワードの中に生きる「生き物」の項目の最初に収められている「蚊」(‘Mosquito’) の詩を取り上げ、ロレンスが蚊をどのようにとらえて描写しているか、また、この詩の中にみられる人間と蚊の共生思想について考察する。

それに先立って、まず「共生」(symbiosis) という語についてふれておきたい。

昨今、この「共生」という語が頻繁に用いられているが、現在われわれが使用するような、社会のあり方としての「共生」という語が使われ始めたのは、1987年に建築家の黒川紀章氏が『共生の思想』⁽¹⁾ で提唱されたことに始まる。「黒川氏のいう共生とは、単に調和・共存・妥協といった概念ではなく、「お互いのもつ個性や聖域を尊重しつつ、お互いの共通項を広げようとする関係」、または「対立・矛盾を含みつつ競争・緊張の中から生まれる新しい創造的な関係」を意味する概念である」⁽²⁾ が、本稿では「共生」(symbiosis) の定義を次のように記す。

「共生」：2種の生物が行動的・生理的結びつきを持ちつつ、同じ環境のもとに調和・共存する関係

ロレンスの生きた時代には、「共生」という語は、黒川氏のいう概念では使用されていなかったが、ロレンスのこの詩には、そういう内容の「共生」という概念を生み出す萌芽がみられる。以下、第一連から順に考察をしていくことにする。

2. 詩人が望む人間と蚊の関係

When did you start your tricks,
Monsieur? （第1連）

いつからおまえは数々の策略を使い始めたんだ、
ムッシュー？

詩人はこの連で、蚊のことを“monsieur”と呼んでいる。この“monsieur”という語は、英語の Mr. および Sir. にあたるフランス語である。1行目の“tricks”は人を欺く策略、時に悪意のないいたずらや悪ふざけを意味しているところから、“monsieur”は、詩人が蚊に込めた敬意を表す語というよりは親しみを込めた呼びかけと考えられる。

また、1行目の“tricks”は、人間と対抗するための蚊の数々の策略を意味しているが、2行目の“monsieur”という語で詩人が蚊に親しみを込めている。

What do you stand on such high legs for?
Why this length of shredded shank,
You exaltation? （第2連）

なぜおまえはそんなに高い脚で立つのだ？

なぜ細長いすねはこの長さなのだ？

心を高めているのか？

蚊に親近感を抱く詩人は、蚊の脚に着目し、蚊に向かって疑問を投げかける。1行目の“legs”という語は、人間の場合でも蚊の場合でも用いられる語であり、詩人が蚊に対して抱いている親近感がここでさらに増しているといえる。そこで脚の象徴について考えてみると、“leg”は「動作、速度、速さ」⁽³⁾を表していて、特に「長い脚は追いかけたり、逃げたりするのにとても役立つ」。⁽⁴⁾実際の蚊の動きは非常に素早く、殺すのも難しいが、それがこの“leg”の象徴で表現されている。また、長い脚は血を吸う標的に近づいたり、逆に標的から逃れたりするのに便利である。それは、高い脚で標的に止まる際に、できるだけ標的に触れる表面積が狭い方が標的に気付かれずにすむからで、逃げるときにも標的に悟られないようにして逃げるためである。また、神秘学においても、「長い脚は、激しい感動、興奮癡を表す」⁽⁵⁾とされているが、神秘学における長い脚の象徴、「激しい感動、興奮癡」は3行目の「高揚」（“exaltation”）と合致する。詩人は、蚊が自らの身体の特徴を生かして、標的の血を吸うために心を高めて隙をうかがっている様子を眺めている。詩人は、人間にはない蚊特有の身体的特徴を挙げることで、蚊のことを理解しようとしているのだということを示し、蚊に疑問を投げかけている。

Is it so that you shall lift your centre of gravity upwards

And weigh no more than air as you alight upon me,

Stand upon me weightless, you phantom? （第3連）

おまえは重心を上の方に持ち上げて

空気同然の重さ、いやそれよりも重さがないほどの重さで

私の上に留まる。おまえは幽霊か？

詩人は、更に蚊を鋭く観察し、空気のように軽い蚊を「幽霊」（“phantom”）にたとえる。この連では、空気よりも軽いはずの蚊の描写としては大げさで、一見適さないように思われる「重心」（“centre of gravity”）という語、さらに、空気よりも軽いことを明確に印象付けることのできる「ほとんど重さのない」（“weightless”）や「幽霊」といった類義語を用い、「重心」という反意語と比較させることで、蚊の軽さや存在を見事に表現している。標的に気付かれないようにこっそり忍び寄るこのような蚊の動作は、人間には到底することができない。このことから、蚊の持つ神秘的側面がうかがえる。

I heard a woman call you the Winged Victory

In sluggish Venice.

You turn your head towards your tail, and smile. （第4連）

活気のないヴェニスで、私は、ある女性がおまえを

翼のある勝利の女神と呼ぶのを聞いた。

おまえは頭を尻尾の方に向け、ほほえむ。

この連の1行目の「翼のある勝利の女神」(“the Winged Victory”)とは、1863年エーゲ海北東部のギリシャ領のサモトラキ (Samothrace) 島で出土した古代ギリシャの大理石像のことであり、サモトラキのニケ⁽⁶⁾ (Nike of SamothraceまたはWinged Victory of Samothrace) と呼ばれている。ニケはギリシャ神話の勝利の女神で、美術家が好んで作るニケ像の多くは翼をそなえ、空から舞い降りる姿にあらわされている。また、アテナイでは、市の女神アテナがニケであったとされる。つまり、ニケは軍神アテナの属性を持っていたといえることができる。そのように考えると、2行目の「活気のないヴェニスで」(“In sluggish Venice”)というのは、古代ギリシャに相当する。詩人のところに留まった蚊を見ながら、詩人の空想は、はるか昔の古代ギリシャにまで及んでいるのである。

このように、蚊をギリシャ神話のニケにたとえたり、「頭を尻尾の方に向け、ほほえむ」(“turn your head towards your tail, and smile”)と擬人的に描写することから、詩人は蚊を、人間同様もしくは人間以上の存在として捉えている。だが、実際に「頭を尻尾の方に向け、ほほえむ」ことは蚊には不可能なことで、詩人の想像にしかすぎない。

How can you put so much devilry

Into that translucent phantom shred

Of a frail corpus? （第5連）

どのようにしておまえは半透明の幽霊のように

か弱い身体の切れ端の中に

そんなに多くの魔法を入れることができるんだ？

詩人は、蚊を再び「幽霊」と呼び、蚊の持つ「多くの魔法」(“so much devilry”)の謎について考える。詩人は、蚊を「幽霊」とたとえることで、蚊には幽霊のような神秘的な魔法めいた力があることを示している。この「多くの魔法」は、魔術の源が血にあるとされた原始的思想に基づいており、詩人は、蚊が小さな体内にたくさん蓄えられるそのような血のことを、この

ようにたとえているのである。

ところで、実際は、蚊は1~2mgほどの血で満腹となる。⁽⁷⁾ だが、通例、標的が途中で動いたり叩いたりするため、一度に目一杯吸うことはできず、何度も吸っては逃げる動作を繰り返している。そのため、蚊がそれほど多くの血を吸っているとは言えない。よって、このような描写は蚊の神秘性を示すための誇張された表現である。

Queer, with your thin wings and your streaming legs,

How you sail like a heron, or a dull clot of air,

A nothingness. (第 6 連)

おかしい、おまえの薄い羽とすらっとした脚で、
鷺のように、また空気の薄ぼんやりとしたかたまりのように、
実在しない物のように滑らかに空中を飛ぶなんて。

蚊の姿はたいへん小さくわれわれには気付かないことも多々ある。そのような蚊は、明らかに存在していて「滑らかに空中を飛んでいる」(“sail”)にもかかわらず、まさしく「実在しない物」(“nothingness”)も同然である。しかし、実際には蚊は、羽をねじりながら1秒間に約600回羽ばたいているのである。⁽⁸⁾ ハチドリですら毎秒20~80回であるので、蚊の1秒間に600回というこの回数は生物中最多である。また、蚊の飛び立つ姿はまさに鷺そのものである。⁽⁹⁾ このように、標的に悟られないようにしながらも自在に空中を飛ぶことは、人間にはできない。詩人は、その意味で蚊に対して畏敬の念と劣等感を同時に抱いている。

Yet what an aura surrounds you;

Your evil little aura, prowling, and casting a numbness on my mind. (第 7 連)

そのうえ、何という靈気がおまえを取り巻くのだ；
おまえの嫌な靈気がうろうろし、私の心を麻痺させる。

詩人は、蚊の周りには「嫌な靈気がうろうろし」(“evil little aura, prowling”)ているのであって、決して「実在しない物」(“nothingness”)ではないのだという。ここで詩人がいうことは、われわれの生活でも当てはまる。そのうえ、詩人は蚊の持つ「靈気」(“aura”)が、詩人の「心を麻痺させる」(“casting a numbness on my mind”)のものであるといい、蚊が持つそのような「靈気」に対して嫌悪感を抱いている。そのような“aura”を持つ蚊は、まさに第3連や第5連で表現されているように“phantom”と呼ぶにふさわしい存在である。

That is your trick, your bit of filthy magic:
Invisibility, and the anæsthetic power
To deaden my attention in your direction. （第8連）

それがおまえの人を欺く策略、少し汚らしい魔術だ：
姿の消失、麻酔の力
私の注意がおまえの来る方向に向かないようにするための魔術だ。

詩人は、蚊が持つ「麻酔の力」（“the anæsthetic power”）という語で蚊の来る方向に詩人の「注意が向かないようにするための魔術」（“To deaden my attention”）の卑劣さを表現している。そしてそれと同時に、この連では、蚊の持つ能力の神秘性をも強調している。

But I know your game now, streaky sorcerer.
Queer, how you stalk and prowl the air
In circles and evasions, enveloping me,
Ghoul on wings
Winged Victory. （第9連）

だが、もうおまえの策略はお見通しだ、縞柄の魔術士め。
不思議だ、どのようにしておまえはこっそり忍び寄り、
円を描いて空中をうろつき、巧みに私の攻撃をかわし、
私の周りを回るんだ、羽をもった悪鬼、
翼のある勝利の女神め。

詩人は、蚊の策略に関して「お見通しだ」（“I know your game now”）と言っている。しかし、策略は分かっているにもかかわらずこっそり忍び寄る蚊に対する嫌悪感や憎悪は高まる一方である。詩人はそのことをふまえて「縞柄の魔術士」（“streaky sorcerer”）、「羽をもった悪鬼」（“Ghoul on wings”）、「翼のある勝利の女神」（“Winged Victory”）と三通りの名で蚊を呼び、蚊に対する嫌悪感や憎悪が高まっていることを表している。

Settle, and stand on long thin shanks
Eyeing me sideways, and cunningly conscious that I am aware,
You speck. （第10連）

留まって細長い脚で立ち、私を横目で見て、
私がおまえに気付いていることにずる賢く感づいている、
小さな染みめ。

詩人は、蚊の素早い動きを眼でしっかりと追いながら、蚊に対しての鋭い観察は持ち続けている。詩人はこれまで「脚」を“legs”と書いていたが、この連では“shanks”に書き換えられている。また、蚊が詩人のことを感づいていることも、「横目で」（“sideways”）や「ずる賢く」（“cunningly”）が意識的かつ効果的に用いられており、詩人の深い洞察力を物語っている。

I hate the way you lurch off sideways into air
Having read my thoughts against you. （第11連）

おまえに対する私の考えを読み取ると、
おまえが空中に飛び出すそのしぐさが私は嫌いだ。

詩人は、蚊に対して、詩人の考えを読み取って「空中に飛びだす」（“lurch off sideways into air”）蚊の習性に対する嫌悪感をぶつけている。詩人にとっては、蚊という小さな存在が人間の考えをすばやく正確に読み取っていることが嫌なのである。このことから、詩人は、人間が蚊と比べて劣っているのではないかと考えている。

このように、蚊の有する数々の策略が原因で、詩人の、蚊に対する嫌悪感は次第に増している。

しかし、詩人、不意打ちごっこをしようと持ちかける。

Come then, let us play at unawares,
And see who wins in this sly game of bluff.
Man or mosquito. （第12連）

じゃあ来い、不意打ちごっこだ。
そして空威張りのこのふざけた勝負で
人間が勝つか、蚊が勝つかやってみよう。

蚊にとって「不意打ち」（“unawares”）は、血を吸うために必ず取る生理的行動であって、血を吸えるかどうかは死活問題である。だが、人間からするとこの蚊の生理的行動は、微量であろうが血を吸うための行動には変わらないので良い印象は持たない。そこで詩人は、“play”

や“game”という語を用いて蚊の生理的行動を「不意打ちごっこ」(“play at unawares”)という、ある種の「ふざけた勝負」(“sly game of bluff”)にすり替えてしまうのである。

You don't know that I exist, and I don't know that you exist.

Now then! (第13連)

おまえは私がいることを知らないし、
私はおまえがいることを知らないでしょう
じゃあいいか！

詩人は、蚊に対して、互いの存在を知らないことにするように強要する。しかし、蚊にとっての関心事は標的の血を吸うことのみにある。詩人がいくら言おうが、人間の言葉は蚊には通じない。蚊には何がこれから行われようとしているのかわからぬまま、こうして人間と蚊の不意打ちごっこは始まる。

It is your trump,

It is your hateful little trump,

You pointed fiend,

Which shakes my sudden blood to hatred of you:

It is your small, high, hateful bugle in my ear. (第14連)

それがおまえの奥の手だ、
おまえの嫌らしい小さなラッパなのだ、
このとんがり悪魔め、
私の性急な血を揺すっておまえを憎い気持ちにさせるのは。
私の耳元の、おまえの小さいが甲高い憎々しいラッパだ。

詩人の宣言どおりに「不意打ちごっこ」は始まる。だが、蚊にとっては常に不意打ちをしているのだから、急にそのようなことを言われても、どうすることもできない。そして、詩人は、「不意打ちごっこ」を宣言することにより対等な関係にするつもりでいるが、蚊の持つ「奥の手」(“trump”)によって、お互いの関係が対等でなくなることを知るのである。このような「小さくて甲高い憎々しい」(“small, high, hateful”)音は、蚊特有のものであり、詩人はそのような音を出す蚊を「とんがり悪魔」(“pointed fiend”)と言って揶揄している。

Why do you do it?

Surely it is bad policy.

They say you can't help it. (第15連)

どうしておまえはそんなことをするんだ？

間違いなく良くないやり口だ。

そうせざるを得ないときいているが。

詩人は、蚊の出す「小さくて甲高い憎々しい」音に対して、「そうせざるを得ない」(“you can't help it”)と知りつつも、それが「間違いなく良くないやり口」(“Surely it is bad policy”)だと言い、嫌悪感を抱きつづけている。

ところで、ここで詩人が言う「間違いなく良くないやり口」とは、人間にとっても蚊にとっても良くないことである。つまり、人間にとっては、羽音で血をゆすられてカッとなるからであり、蚊にとっては、音を出すことによって標的に気付かれる可能性があるからである。

If that is so, then I believe a little in Providence protecting
the innocent.

But it sounds so amazingly like a slogan,

A yell of triumph as you snatch my scalp. (第16連)

とはいえ、じゃあ私は、罪のない者であるおまえを守る神の摂理を
少しばかり信じよう。

でもあの音はトキの声のようにとてもびっくりさせる。

私の頭皮をおまえがひったくる時の勝どきのようきこえるのだ。

ここで詩人は、「とはいえ、じゃあ」(“If that is so, then”)と言って譲歩して「神の摂理」(“Providence”)を信じることで、蚊に対する心のゆとりを見せる。しかし、詩人にとって、蚊特有の音はそのような態度を示す詩人を嘲笑するような音であり、まだ何か奥の手が蚊の手の内にあるのではないかと、詩人に警戒心を抱かせる。よって、詩人には蚊のかすかな羽音もトキの声のように大きなものに聞こえるのである。

Blood, red blood

Super-magical

Forbidden liquor. (第17連)

血、赤い血、
魔法よりもすばらしい
禁断の酒だ。

もともと情熱の色である「赤」(“red”)は、勝利と支配の色としても知られている。詩人は、蚊の神秘的な魔術の源が血にあると考え、血のことを「禁断の酒」(“Forbidden liquor”)とたとえている。

I behold you stand
For a second enspasmed in oblivion,
Obscenely ecstasied
Sucking live blood,
My blood. (第18連)

私はおまえが留まっているのを眺める。
ほんの一瞬おまえは我を忘れ、
忌々しいほど有頂天になり
生き血を吸う、
私の血を。

詩人は、蚊が自分の身体に留まって生き血を吸っているにもかかわらず静観している。詩人は、その時の蚊を「我を忘れ、忌々しいほど有頂天に」(“enspasmed in oblivion, / Obscenely ecstasied”) 生き血を吸っているというように擬人的に表現している。この時の蚊は、明らかに無意識の状態にあり、血を吸うことのみに専念している。これまで蚊は、人間らしいしぐさを一切せずに、標的の血を吸うために、人間を欺く数々の策略を用いることにより、詩人が望む対等の関係をことごとく打ち崩してきた。しかし、そんな蚊が初めて人間らしいしぐさを見せたのである。詩人の眼には、そのような状態の蚊が、自分が蚊であることを一瞬忘れ、人間らしい振舞いをしているように映ったために叩き殺さなかつたのである。このことから、詩人の、蚊に対する考え方が揺らいでくることとなるのである。

3. 共生への歩み寄り

Such silence, such suspended transport,

Such gorging,

Such obscenity of trespass. (第19連)

そのような静けさ、そのような忘我の恍惚状態、

そのような血のむさぼり飲み、

そのような邪魔の嫌らしさ。

蚊にとって生き血はまさしく「禁断の酒」であり、それを味わうかのように血を静かに「むさぼり飲」(“gorging”)む。そのような状態は、s音の連続によって効果的に表現されている。この連でも詩人は、「忘我の恍惚状態」という表現で繰り返し擬人的描写を用いて蚊にも人間らしさがあることを強調している。

You stagger

As well as you may.

Only your accursed hairy frailty,

Your own imponderable weightlessness

Saves you wafts you away on the very draught my anger makes

in its snatching. (第20連)

おまえは私が思ったのと同様によろめく。

おまえの呪われた、毛のように軽い身体が、

おまえの想像のつかないほどの重みのなさが、

おまえを救うのだ。私の怒りがおまえを捕まえようとして

起こす風に乗って

おまえはふわりと飛び去るのだ。

蚊は、禁断の酒である詩人の新鮮な生き血をじっくり堪能して「よろめいて」(“stagger”)いるにもかかわらず、詩人の怒りに満ちた攻撃を身軽にかわして空中に飛び去る。この連でも、蚊は「よろめく」という人間らしいしぐさを見せている。しかし、逃げるときには我に返って素早く逃げている。詩人は、蚊の身軽さ・素早さを表現する際、agile (「身軽な」) といった語

を使用せず、「重みのなさ」(“weightlessness”)という語を用いており、そうすることで、よりいっそう「存在しないもの」(“nothingness”)に近い存在であることを印象付けることに成功している。そのような蚊の逃げ方は、結局詩人には、人間と対等でないものとして映り、再び蚊に対する嫌悪感を抱くのである。先ほどまで人間らしいしぐさを見せていたかと思えば、身の危険を察知すればすぐに蚊本来のしぐさに戻ることができる蚊に、詩人は嫌悪感を抱く一方、人間存在に劣等感を抱くのである。

このように吸血と危険回避を器用に繰り返す蚊は、ギリシャ神話のアポロのように「冷静な頭の持ち主」⁽¹⁰⁾ だといえる。アポロは古代ギリシャの文明と知性を代表する存在であり、凱旋車で大空を天がける太陽神とも同一視されているが、「古代ギリシャの文明」に関しては、第4連で考察したとおり、蚊をニケやアポロにたとえることによって、蚊が「古代ギリシャの文明」を代表する存在だということができる。また、先述のとおり、ニケはギリシャ神話の勝利の女神であるから、ニケにたとえられた蚊の羽音は勝利の凱旋歌といえる。更に、アポロは必殺の矢を射る天界の射手でもあり、多くの手柄をたてたとされているが、この「必殺の矢」は蚊の刺す行為であるといえる。このように、詩人は蚊に神の属性を付与することによって、蚊に敬意を示しているといえることができる。

Away with a pæan of derision,
You winged blood-drop. (第21連)

嘲りに満ちた勝利の歌はやめろ！
翼を持った血の玉め。

詩人は、蚊の傍若無人ぶりを目の当たりにして次第に怒りを募らせていく。

先述のアポロは歌と音楽の神でもあるが、音楽の神々の中でも特に重要視されている。詩人にとっては、血を堪能した後、軽やかに空中を飛び回る蚊の羽音は嘲笑に過ぎないが、蚊にとっては勝利の凱旋歌なのである。しかし、詩人と蚊の間には共通の理解はなされていないがために、詩人の望むような共存関係は築くことができないのである。

Can I not overtake you?
Are you one too many for me,
Winged Victory?
Am I not mosquito enough to out-mosquito you? (第22連)

私はおまえに追いつくことはできないのか？

私には太刀打ちできないほど多勢なのか、

翼を持った勝利の女神よ？

私はおまえという蚊を凌ぐほど十分な蚊ではないのか？

「追いつく」(“overtake”)という語があるように、詩人は今までのように蚊に人間らしさを求めるのをやめて、詩人自らが蚊らしくなれはしないかと考えを改める。詩人は、蚊に自らが歩み寄る姿勢を示すことで、人間と蚊が共存関係を築くことができるのではないかと考えたのである。

Queer, what a big stain my sucked blood makes

Beside the infinitesimal faint smear of you!

Queer, what a dim dark smudge you have disappeared into! (第23連)

不思議だ、おまえというごく小さなかすかな染みに比べて

何という大きな染みを私の吸われた血が作るのだろう！

不思議だ、ぼんやりとした暗い染みとなって

おまえが消えて行ったのが！

この詩の最終連であるこの連には、dやsの頭韻 (alliteration) が多く用いられている。この連にある「染み」(“stain”, “smear”, “smudge”) という語が、どれ一つとして同じではないことや、血の「染み」の大きさの違いからも、詩人と蚊の間にある隔たりが最後まで縮らないままであったことが分かる。また、“stain”は、蚊に血を吸われて赤く腫れ上がった様子を示したものととも考えられる。このように、詩人は自ら蚊に歩み寄ってみるものの、結局詩人と蚊の間には共通の理解は最後までなされていないがために、詩人の望むような共存関係を築くことができずに、詩人は蚊を叩き殺してしまうのである。そのことは、この連で繰り返し「不思議だ」(“Queer”)と言っていることからいえる。

4. 結 論

以上みてきたように、詩の冒頭では、詩人は蚊に人間らしさを求めて、様々な名前で蚊を呼ぶことで蚊を理解しようと考えていたが、詩人自身の身体に留まった蚊が血を吸っている様子を静観するうちに、詩人は、蚊には人間らしさが備わっているように感じる。そのことがきっかけとなり、詩人自らが蚊に歩み寄ること、すなわち人間が蚊らしさを持つことによって蚊と対等になることを考え始めるが、結局、詩人と蚊の間には共通の理解は最後までなされてい

いがために、詩人の望むような共存関係を築くことができずに、詩人は蚊を叩き殺してしまう。

ロレンスの詩集、『鳥・獣・花』には、この詩のように、人間と他の生物の対峙する場面がたくさんある。そのなかでも特に、この詩は「魚」(‘Fish’)や「蛇」(‘Snake’)や「人間とコウモリ」(‘Man and Bat’)の詩とよく似ている。これらの詩には、人間以外の生物に神を見出しているものの、人間中心の間違った教育を受けたことによって、他の生物に危害を加えたり追っ払ったりしてしまうという共通点がある。そのような状況では、人間とこれらの生物の対等な関係は成立せずに終わってしまうのである。

飯田武郎氏は、ロレンスの詩の研究書⁽¹¹⁾の中で、以下のように言っている。

「ところで、石川勝久は、ロレンスの一連の動物詩を小動物などの「存在を見下し、彼らを見下して人間存在（中略）の優越性を誇示しよう」としたものであると結論している（以下省略）」

しかし、論者は「ロレンスの動物詩が小動物などの「存在を見下し、彼らを見下して人間存在（中略）の優越性を誇示しよう」としたものである」とは考えず、むしろ、人間存在に劣等感すら感じていたのではないかと考える。その根拠を以下に示す。

1. 「存在を見下す」のであれば小動物などに神の属性を付与する必要はないこと。
2. もし、石川勝久（1999）⁽¹²⁾のいう通り「ロレンスの動物詩が小動物などの「存在を見下し、彼らを見下して人間存在（中略）の優越性を誇示しよう」としたものである」とすれば、この詩にみられる人間の、他の動物への歩み寄りや共生思想が意味をなさないということ。
3. 最終連（第23連）の「ごく小さな」(“infinitesimal”)という語や、「何という大きな染み」(“what a big stain”)という誇張法が、詩人が人間存在に劣等感を感じていたことを示しているということ。

確かに石川勝久（1999）がいうように、伝染病を媒介する蚊は、「きわめて恐ろしい存在」⁽¹³⁾であり、そのことには論者も異存がない。しかし、「20世紀の詩人ロレンスには、もはやそれらのもの〔＝小動物〕は無意味なもの“nothingness”に過ぎない」というのは、「ロレンスは人間社会と近代文明に絶望し、それらに背を向けた。そして、自然界の動植物に救いを求めようとした。しかし（中略）異国の大地に彼が見出したものは、動植物の持つ他者性であり、それは人間に容易に同化され得ないものであった。」⁽¹⁴⁾という文章が示しているように、決して「無意味なもの」ではない。さらに、ロレンスが「人間社会と近代文明」をみかぎって「自然界の動植物に救いを求めようとした」のは、自然界の動植物が「人間社会と近代文明」の行き詰ま

りを解消するようなものを有していると考えていたからであって、決して自然界の動植物は「無意味なもの」ではないといえる。

そこで、論者は、詩人が蚊を叩き殺してしまうのも、詩人が他の生物と比べて人間存在に劣等感すら感じており、その苦しみから解き放たれようと模索したが、結局それを実現することは到底無理であることを悟ったためであろうと考える。

また、茂木幹義 (1998)⁽¹⁵⁾ は、生物学的な「共生」の定義を「異種生物間の助け合いを含む関係」⁽¹⁶⁾ とし、「蚊と人の間には生物学的な共生は成立しない」⁽¹⁷⁾ という。そこで茂木氏は、蚊と人の共生を「蚊はいるが被害はない、被害はあるが許容できる状態」⁽¹⁸⁾ とし、低平地での蚊と人の共生の可能性を考察している。茂木氏は、考察の過程で「蚊が病気を媒介することが明らかになった」⁽¹⁹⁾ のは19世紀末であることを述べているが、ロレンスは蚊が病気を媒介することを知っていた可能性が高い。更に茂木氏は、蚊と人の間の「共生」を第1の共生と第2の共生の2つに分けている。

茂木氏によれば、第1の共生とは「蚊に吸血されるが病気には感染しない」⁽²⁰⁾ 状態であり、「現在では達成された」⁽²¹⁾ とする。一方、第2の共生とは、「蚊に吸血されるが我慢できる程度である」⁽²²⁾ 状態であり、茂木氏は、「今の日本で求められるのは第2の共生を達成するための指針である」⁽²³⁾ とすると同時に、吸血対策の要求が高まったために「極端な場合には、蚊がいてはいけないというところまで行きついてしまう」⁽²⁴⁾ 危険性があることを指摘し、「蚊による吸血被害を許容できなければ、蚊と人の間で第2の共生は実現できない」⁽²⁵⁾ という。そしてこの詩でみられる共生思想は、明らかに茂木氏のいう第2の共生にあたる。

以上のことから、この詩には、人間と他の動物との共生思想と他の生物に対する畏敬の念が深く根付いており、現在われわれが使用するような、社会のあり方としての「共生」という概念を生み出す萌芽がみられるといえることができる。

〔注〕

(1) 黒川紀章著『共生の思想—未来を生きぬくライフスタイル』(徳間書店 1991)

(2) (財) 全国法人会総連合会長 安西邦夫氏による

<http://www.zenkokuhojinkai.or.jp/message/kaityo_2004.htm>

(3) アト・ド・フリース著『イメージ・シンボル辞典』p.390 (大修館書店 1984)

(4) Ibid., p.390

(5) Ibid.

(6) パリ、ルーブル博物館所蔵。前190年のシリア海軍との海戦で勝利を収めたロドス島人がサモトラキ (またはサモトラケともいう) 島の神域に奉納した記念像。女神が空から船の舳先に降り立った瞬間を捉えており、左手を下げ、挙げた右手には銀属性のリボンか冠を持っていたと推定される。



出典：松島道也著

『図説 ギリシア神話[神々の世界]篇』

p.93 (河出書房新社 2001)

- (7) 蚊の研究室：池庄司敏明氏による<<http://www.mushitec-fukushima.gr.jp/index.html>>
- (8) 仰天！人類未体験映像 驚異の10秒SHOW!! 「あなたの常識は崩壊 超スローで見る衝撃」(中略) & 1秒600回で羽ばたく蚊& (以下略) (2004年10月8日毎日テレビ21:00~22:54放送)
- (9) 注(8)と同番組による
- (10) バーナード・エヴスリン著、小林稔訳『ギリシア神話小事典』(社会思想社 教養文庫 1979)
- (11) 飯田 武郎 編『D.H.ロレンス一詩と自然』 p.82 (松柏社 2003)
- (12) 石川勝久 「D. H. ロレンスの『蚊』を読むーモダン／ポストモダンの狭間でー」
(『Cross Culture』 17号 25-47 (光陵女子短期大学 1999))
- (13) Ibid., p. 40
- (14) Ibid., p. 25
- (15) 茂木幹義 (佐賀県医科大学医学部微生物学教室 助教授) 「蚊と人の共生を考える」(『低平地研究』
7号 5-10 1998年3月)
- (16) Ibid., p. 5
- (17) Ibid.
- (18) Ibid.
- (19) Ibid., p. 6
- (20) Ibid.
- (21) Ibid.
- (22) Ibid.
- (23) Ibid.
- (24) Ibid.
- (25) Ibid.

〔参考文献〕

大平章・加藤英治・武藤浩史ほか編『ロレンス文学鑑賞事典』(彩流社 2002)

倉持三郎著『D. H. ロレンス』(人と思想 79) (清水書院 1998)

ピーター・ウィドーソン編著 吉村宏一・杉山泰ほか訳『ポスト・モダンのD. H. ロレンス』(松柏社 1997)

ポール・ボプラウスキー編著 木村公一・倉田雅美・宮瀬順子訳編『D. H. ロレンス事典』(鷹書房弓プレス)

松田幸雄訳『鳥と獣と花』(彩流社 2001)

Jenny Weatherburn, *D. H. Lawrence: A Beginner's Guide* (Hodder&Stoughton, 2001)

Vivian De Sola Pinto and Warren Roberts, *Complete Poems of D. H. Lawrence* (Penguin Twentieth-Century Classics, 1994) [詩の底本と使用、本稿内ではCPと略記した]

〔付記〕

本稿の執筆にあたって、御指導御鞭撻を賜りました指導教官の古我正和教授をはじめ、英米学科の先生方にはこの場を借りまして深く感謝いたします。

(すずき さとし 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導：古我 正和 教授)

2004年10月15日受理

